



第二十五回

能青葉仙

喜多流 能

鍾 尪

佐々木多門

和泉流

狂言

空腕

人間国宝

野村

万作

喜多流 能

清 経

人間国宝

友枝

昭世

「清経」
友枝昭世 所演

とき 2023年 **5月20日** (土)

開演 **13:30** 開場 **12:45**

ところ 電力ホール (仙台市青葉区一番町3丁目7-1)

入場料 **S席 11,000円** **A席 8,500円** **B席 6,500円** **学生席 2,500円** (全席指定・税込)

一般発売 3月1日(水) 10:00~

※未就学児入場不可。 ※延期・中止の場合を除き払い戻しはできません。

※学生席の販売は河北チケットセンターのみ。公演当日学生証をご持参ください。 ※車椅子で鑑賞をご希望のお客様は河北チケットセンターまでお問い合わせください。

プレイガイド 藤崎、仙台三越、仙台市市民文化事業団 (日立システムズホール仙台)

チケットぴあ <https://t.pia.jp/> (Pコード 517-599)、ローソンチケット <https://l-tike.com/> (Lコード: 22798)

河北チケットセンター ☎022-211-1189 (10:00~14:00 土・日・祝休)

お問い合わせ 河北新報社事業部 ☎022-211-1332 (10:00~17:00 土・日・祝休)

■主催 / 仙台青葉能の会、(公財)仙台市市民文化事業団、河北新報社 ■共催 / 電力ホール

◆協力 / 仙台市博物館、中尊寺、(公財)瑞鳳殿、NHK 仙台放送局、伊達家伯(かはく)記念會、白石市古典芸能伝承の館「碧水園」

◆後援 / 宮城県、仙台市、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、仙台市能楽振興協会、TDC東北放送、仙台放送、ミヤギテレビ

Khb 東日本放送、Date fm、松井建設(株)東北支店

※伊達家より家紋使用許可済み

●本公演は、関係機関によるガイドラインにもとづいた感染症予防対策を講じた上、開催します。ご協力をお願いいたします。

詳細は河北新報社ホームページ <https://www.kahoku.co.jp/events/> の注意事項をご確認ください。



※伊達家より家紋使用許可済み

第二十五回

能葉青台仙

献香之儀

仙台伊達家十八代当主 伊達 泰宗

開演 午後一時三十分

シテ・清経の霊 友枝 昭世
大島 輝久

一時四十五分

喜多流

能

清経

ワキ・栗津三郎

宝生 常二

大鼓 國川 純
小鼓 鶯澤洋太郎

松田 弘之

後見 中村 邦生
友枝 真也

地謡 佐藤 陽
金子敬一郎 狩野 了一
友枝 雄人 大村 定
内田 成信 栗谷 明生

——休憩二十分——

和泉流

狂言

空腕

太郎冠者 野村 万作

主 石田 幸雄

後見 破石 澄元

仕舞

放下僧

小唄 佐々木宗生

地謡

佐藤 寛泰
内田 成信
友枝 雄人
塩津 圭介

喜多流

能

鍾馗

ワキ・旅人

宝生 常三

大鼓 國川 純
小鼓 鶯澤洋太郎

小寺真佐人
松田 弘之

アイ・終南山麓の者

飯田 豪

後見 塩津 哲生
谷 友矩

地謡

佐藤 陽 金子敬一郎
塩津 圭介 狩野 了一
友枝 真也 長島 茂
佐藤 寛泰 内田 成信

終演予定 午後四時四十分頃

能「清経」(きよつね)

平家の一門・左中将清経は、命運の行末をはかなみ、豊前国柳ヶ浦に身を投じてしまいました。その形見の遺髪と守袋を携え、家臣の栗津三郎が都に残された清経の妻のもとへ入水のことを告げに参上します。

やりきれぬ悲しみと恨みに嘆きくれる妻、その夢枕に清経の亡霊が現れます。ここらならずも戦に巻き込まれてゆく悲劇、運命のみじめさ。宇佐八幡の神託にも見放され、黒い不安だけが彼の中にあるでした。月夜の船上で名残の笛を吹き、今様を朗詠して覚悟の自殺をはかったことを語り、修羅道の地獄の苦をも見せ、やがて仏果を得て消えてゆきます。

清経は平重盛の三男で、横笛の名手。優美な才能を持った平家の公達の滅びゆく姿は、ひとしお哀れを誘います。夫婦の深い情愛と、その二人を引き裂く、戦争の不条理を描いている、世阿弥作の修羅物の名曲です。

狂言「空腕」(そらうで)

ある夕方、主人の命で使いに叫ばれた太郎冠者。物影を追剥と思い込み、怯えて主人から借りた太刀を差し出し命乞いをします。その様子を見ていた主人は腹を立て、太郎冠者から太刀を取り上げた先に屋敷へ戻ります。やがて帰宅した太郎冠者は主人に、太刀を失くした顛末を武勇伝のようにして語るのですが…。

「空腕」とは偽りの腕自慢のこと。前半はいいものに怯える姿、後半は見えない敵との闘いを武勇伝として大袈裟に語る、太郎冠者の独演が見どころです。

能「鍾馗」(しょうき)

中国の唐代、終南山の麓に住む男が都に赴く途上、その昔、進士の試験に落第して悲憤のあまり宮殿の階段に頭を打ちつけて自殺したという鍾馗の霊に声をかけられます。鍾馗は執心を翻して、国土を守護する誓いを立てたといひ、佛く無常の人生を語って消え失せます。男は霊を慰めるために読経をすると、鍾馗は宝剣を持って真の姿を現し、皇居宮殿の隅々まで悪鬼を退治する有様を目の当たりに見せ、平安の治世を祝福します。

あまり上演されない稀曲ですが、悪鬼を払うこととで不穏な気を除く勇壮な内容で、端午の節句の時期にもかなう、青葉能にふさわしい曲です。